

無想録 二十一 「よきことにて候」

疑い、呪い、誤解、非難、攻撃、等々人生には嫌なことが多い。

心が、攻撃は受け取るまいとし、賞讃のみを引き受けようとし、正解されんことを求めて、誤解されることを嫌う。追えども去らぬ凡情である。

「光明団は、聴聞と言わずに求道と言うから異安心だ。」

「聞いて助けられると聞いていたに、光明団は覚えて助けられると言ったから違う。」

「光明団は一益法門だから退団する。」等々

情ないほどつまらない問題、愚にもつかないほど嫌な誤解、ちつとも私の言つたことを正解していいない浅薄な言葉である。けれども、そうしたことを言いふらす人が、社会的位置や勢力を持つている場合、この一人が、その町へ、その村へ、時にはその郡へ、正しいものが流れてゆくことを拒む。私どもは一体どう考えたらいいのか。

「天に声あり、気に入らなければ、誤解、非難、攻撃、疑い、中傷等々を全部とりのけてやろうか。」……………？ ？ ちよつと待つて下さい。

戦<sup>いくさ</sup>がはじまる。弾丸がシュツシュツとうなつて飛んで来る。たいがい弾丸は流れてゆく。いちいち当たるものではない。時々当たつてころころと斃れる。人生は1戦場のようなものではあるまいか。来る弾丸も来る弾丸も全部が当たつたらたまるものではない。時々一つか二つ当たる。

「おいお前は何が一番怖いか。」

「……………待つて下さい。そう問われると、ちよつと返答に困ります。」

「非難か、攻撃か……………それとも策略か、中傷か。」

「待つて下さい。考えて見ると、それは真に怖いものではない気がします。」

「それなら何か、早く返答しろ。」

「わかりました。恐るべきものは、私の内にいる奴<sup>やつ</sup>でありました。」

「何じゃと、内にいるもの。」

「そうです。褒められると、当たつてはいなくてもニコニコし、謗られると、当たつていても、くやしがる、外の声一つで、グラグラしたり、あるいは剛情を張つたりして、真実の道を失う、この内の奴こそ、一番恐るべきものでありました。」

「まだあるはずだ。考えてみよ。」

「私の深い魂の声を聞いておれば、こう申します。」

「何と申すか。」

「一番恐るべきは、真実だと答えます。」

「そうだ。そのとおりだ。たとい汝の敵に見えても、それが策略の人であつたら安心せよ。策略はけつして永遠のものではないから。」

汝の敵は怒つて来る。安心せよ。怒りは滅亡の道である。永遠の相ではないから。疑われるくらいは何でもないことだ。お山に雲がかかったほどにもないことだ。

相手が、嫉妬から矢を放つた時、安心せよ。その矢はまず相手の心臓を貫いて飛び出すものだ。恐るるに足らない。

誤解は、その責汝になくて、誤解する者の自損である。春の雪だ。何かちよつとすれば消えるであろう。

安心せよ。そのほか、真実以外の何ものも、あまりに恐るるには足らない。」

底なき如来の智慧海に入れ。

人生はこのままでいいのだ。

恐れても恐るべきは、聖者、賢者、智者である。

人間の一切の愚劣なはからいを超えて、正法の前に真に合掌して求道三昧にある人だ。

仏、法、僧の三宝の前に、純粹な信をもつて合掌することほど至難なことがあるか。

寝そべつていてもわかる真理？ がある。

耳だけあればわかる真理？ がある。

頭だけあればつかめる真理？ がある。

合掌せねば受取れない真理がある。

いかに時代の大眾が、挙つてこの唯一の世界を去るがごとく見ゆるとも、人間が、真実を求め、真理を愛して生きている者である以上、この忠実なる「真理への信順」の世界は永遠に滅ばない。しかして人生はこの人によつて代表される。

菩提樹下、正覚の座に結跏趺座した釈尊は、今や正覚を成就せんとして大悪魔軍に宣言していわく

「汝の

第一軍は、楽欲

第二軍は、不快

第三軍は、飢渴

第四軍は、渴愛

第五軍は、懶惰

第六軍は、怖畏

第七軍は、疑い

第八軍は、虚栄と剛情

第九軍は、名利

第十軍は、自らを讃め、他を毀ることなり。

これは汝の軍、汝の武器なり、勇者は勝ちて折伏し、安らけきを得たり。」と。

悪魔の第一軍は楽欲。楽しみを求めて太く短くと、凡情がささやく、この魔軍に滅ぼされたる人、古往今来いくばくなるぞ。

信念の前にこの悪魔軍を克服せよ。

第二軍は不快。不快を歓喜に転ぜよ。不快は生命の消失である。

第三軍は、飢渴。汝はかつて、この魔軍と戦いたることありや。今もそれにおびやかされてはいないか。

「光明団のご主張も結構ですが、妻子が飢えてはなりませんので。このまま葬式屋でおわるのですよ。」

「先生、私には門徒も少ないのです。とてもやってゆけません。どうしましょうか。」

「よろしい。ひき受けます。今日から、この町でだれにでもいい。聞いてくれる人があれば、正法を語りなさい。力いっぱい語りなさい。そして飢えたら、私が『正法に生きて飢えたる者の墓』世界最初の光輝ある墓を樹てましょう。」

その人は決然として起った。

第四軍は、渴愛、狭く言えば享樂的人間愛に溺れることである。広く言えば、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根の享樂に囚われて、道を忘れるのである。本能的享樂がいに現代青年を滅しつつあるか。

第五軍は、懶惰らんだ、なまけである。精進なくして何の生活ぞ。なまけは、人生を無意味におわる第一方法である。

第六軍は、怖畏おそれである。正しい道を行こうとする。この魔軍が現われる。道を変更して、邪道とも知らず、滅びの道とも知らずして迷路に堕ちてゆく。弱者は罪惡の根源である。死をも怖れざるは丈夫の面目。金剛不壞の信、よく第六軍を超克せよ。

第七軍は、疑い。疑惑は、生死流轉の唯一の道、疑惑ある所、真の生活なし。仏道は「信」の一字につきる。第七軍は仏力によって退散の世界である。

第八軍は、虚榮と剛情。もし汝の上にこれを見得ないならば、他人を凝視せよ。昨日会いし人も今朝語りし人も、この悪魔の捕虜ではないか。ああ。虚榮よ。剛情よ。この人にだけは、安心して対座ができる。永遠の力の人ではないからである。ただ、汝に巢食うこの悪魔はなかなか容易に姿を見せないから、用心肝要。

第九軍は、名利。名利を求めて、正法を求めず、名利ゆえに生活をまげる。大地に名利なく、迷いの空中に名利あり、浮足立ったる平家勢、共に事をはかるに足らず、力とたのむに足らず。名利を与えて列外につれてゆかれる。鋭いかな、悪魔の戦術。

第十軍は、自讃他毀。無くて七癖、自慢自讃のくせのない人があろうか。自らをほめ、他を毀つて、自らを高めようとする。自らを安価にし、卑しくすることこれ以上はない。仏は独尊の世界に自他を尊重し、凡夫は独慢の世界に自讃他毀する。

以上悪魔の大軍は、信なければ、おそれてもおそるべし。南無金剛不壊の大信の前には、巖にあたる波よりも弱い。

他人、この悪魔となつて来るも、けつしておそるに足らない。ただ汝自身の内にありて、汝になりきることをおそるべし。

智慧光によりて、汝の衷うちにこの十軍を見出すべし。見出された時悪魔はすでに克服されたる時である。しかして如来利他の大信なくしては、見出されない。

人生には、疑い、呪い、誤解、非難、等々の嫌なことがたくさんある。だが結論はつきりした。

氷は冷たく、火は熱いまま、好きなことは好き、嫌なことは嫌なままで、そのままがいいのだ。

親鸞聖人不滅の信境の告白、億々の衆生がこれによつて救われた大文章たるあの歎異抄の第二章はいかにして生まれたか。

ご長男善鸞師の秘事法門の惑乱と、日蓮の四個格言の折伏とによつてぐらついた関東の同行の上洛によつて生まれたのだ。

この二つの痛ましい事件がなかったならば、『歎異抄』第二章は生まれなかつたであらう。

しかして聖人はこれをいかに考えられたか、「御消息集」に曰く

「慈信坊に賺すかされて信心みな浮かれあうて在しまし候ふなること、かへすがへすあはれにかなしう覚え候、これも人々を賺し申したるやうに聞え候ふこと、かへすがへすあさましく覚え候、それも日ごろ人々の信の定まらず候ひけること、あらはれときこえ候、かへすがへす不便に候ひけり、慈信坊が申すことによりて、人々の日頃の信のたじろぎあうて在しまし候ふも、詮ずる所は人々の信心の眞実ならぬこと、あらはれて候、よきことにて候。」

迷う者に向かつては「かへすがへすあはれにかなしう覚え候」との大慈悲はある。だが慈悲あればこそ「信心の眞実ならぬこと」を知らしめる契機となつて、正信に歩むことのできたことは「よきことにて候」である。

いかなる矛盾の中にも、無碍の一道を生きるものには、統一が見出せる。

逃ぐれば逃げよ。それもよし。叛けば叛け。それもよし。治乱興亡、有為転変、千々に碎くる小波に、映る冲天の月の光。どこを一体変えるのだ。

地震、雷、火事、親爺、嫌は嫌にちがいない。好きは好きにちがいない。

世界ではある。  
賛成、反対、非難、賞讃、誤解、正解、迫害、攻撃……等々、なんとにぎやかな  
南無阿弥陀仏に生かされて見れば、「何もかもよきことにて候」。